経済学がもっと面白くなる〈情報＆メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報
【エコン】
2010.秋・冬号

econ.

No.23

Econ. Crossing

特集 学園DNAが函館の未来を担う!

●函館在住OB座談会　●地域研修「函館への思い入れ」
●interview OB訪問―働きマン❻はこだて柳屋 若杉充宏さん

news1　NIE 出前講座 / 2010年度地域研修報告会
特別講演会「子育て・教育で憧れのまちに」
介護現場の検証とこれからを考えるシンポジウム
連載企画　私の履歴書 伊藤淑子教授
news2　経済学部ゼミナール協議会の活動報告
学外有識者による講義
北海学園大学ポータルサイトスタート

クリスマスファンタジー
幸せのもみの木

● 復元された箱館奉行所

函館市と100万ドルの夜景

函館市は渡島半島の南東部に位置し、太平洋･津軽海峡に囲まれ、その地形は函館山と陸地を砂州が結ぶ独特の形状からなる。街並の美しい夜景は「100万ドルの夜景」ともいわれ、香港･ナポリと並び世界三大夜景と称されることもある。また、国内においては神戸･長崎をおさえて日本三大夜景の主位に挙げられる。その三都市は昨年ともに開港150年の歴史を迎えた。写真発祥の地の一つとしても知られ、さまざまな文化が交差する独特の雰囲気が"エキゾチックな町"の魅力を高めている。観光客に人気が高く、これまで多くの映画の舞台にもなってきた。また、今年秋には五稜郭公園内に箱館奉行所が復元された。冬のイベント、クリスマスファンタジーや12月4日の新幹線新青森駅までの延伸効果などにより、今冬も賑わいを見せている。（2～5ページに函館特集記事）

特集 Econ. Crossing

「学園DNA（遺伝子）が函館の未来を担う！」

北海学園大学では2011年度の入学試験から函館会場を新設します。そこで、今回の特集のテーマは「函館」です。函館は昨年開港150周年を迎え、さらに2015年の新幹線開業を控え、ますます多くの注目を集めています。本学部にも、函館出身の学生はもとより、卒業後、函館でご活躍の方々がたくさんいらっしゃいます。今回のecon. 特集では、函館でご活躍の4名の卒業生の方に学生時代の思い出や現役生へのメッセージなどについてお話をうかがいました。また、本学部地域研修で毎年函館を訪問している山田誠治教授、「働きマン」若杉充宏さんにもお話をうかがいました。

函館在住OB座談会

○出席者
室田　幸治氏　有限会社おもと薬局
鎌田　恵一氏　株式会社ふくいフラワー
髙橋　英明氏　未来テック
石亀　剛氏　函館市港湾空港部
●聞き手
宮島　良明（経済学部講師）

北海学園大学卒業アルバム1984・85・86年より、
左から、室田さん、鎌田さん、髙橋さん、石亀さん

●経済学部
宮島良明 講師

札幌とは違う魅力の「函館」ブランド

●皆さんは、大学卒業後Uターンなどの形で就職されて、現在函館にお住まいですが、函館の暮らしはいかがですか。函館は魅力的なまちのランキング調査で、札幌とともにいつも上位に入っていますが、その函館のまちの紹介などからお話し頂ければと思います。

室田 有名な夜景に始まり、食べ物ももちろん美味しい良い観光地です。夜景があり海があり、情緒豊かで、神戸に似たような雰囲気があります。少し田舎ですけど。

●おしゃれな雰囲気の街並みで、洗練されている感じがしますが？

室田 それは神戸ですよ。洗練されているとは言えないのが函館。神戸の田舎バージョンというか、エキゾチズムはありますね。

髙橋 ブランドとして「函館」イメージというのはありますよね。

室田 温暖なので、北海道だけれども割と雪も少なく、札幌ほど冬の寒さも辛くない。

髙橋 北海道の軽井沢って言われていますね。夏は涼しく。

室田 言い過ぎ（笑）。空港が町からすぐで、札幌から千歳に行くより近いので、東京などには近いイメージがあります。

石亀 5年後には新幹線も函館まで来ます。そうなると東京から函館までは3時間40分くらいで着きますからね。

髙橋 私はハンドボールをやっていますが、大会誘致などすると皆函館で大会をやりたいと言うんです。空港は近いし、温泉（湯の川温泉）はあるし、こんな良い所はないのですが、施設が少ないし、小さくて古い。もっと整備されると来訪客も増えますね。

鎌田 昨年は開港150周年で盛り上がりましたが、歴史もあるし多様な文化もある。その意味では札幌と違う魅力があります。

●皆さんご出身は函館ですか？

髙橋 そうです。僕は大学でバスケットボールをしようかと思ったけどハンドボール部に魅かれて入部し、現在でも審判やプレーヤーとして活動しています。

石亀 私は函館市との合併前の戸井町出身です。文系志望だったものですから、道内私大では一番環境が整っているのではないかと思い進学しました。

室田幸治さん
1984年経済学科卒業
北海高校出身

室田 僕はUターンではなく札幌育ちです。北海高校だったので、推薦で入りました。大学を卒業し製薬会社に就職、東京支店にいました。その後函館勤務になり、35歳の時に函館で脱サラしまして以後函館です。僕の独立の地です。

鎌田 私も札幌育ちです。就職してすぐに函館支店勤務になり、函館に来ました。25年経ちます。今は妻の実家の家業を継いでいます。

コンパも試験も、大学に行くのが楽しかった学生時代

●大学時代の話に移っていきたいと思いますが、

皆さんどのような学生時代でしたか？

石亀 函館から出て行き地下鉄に乗り、札幌はとても都会だと感じました。

髙橋 僕らの頃は地下鉄東豊線はありませんでしたから、大学へは中島公園から歩きました。豊平川を越えて橋を渡りましたね。

●そうですか、その当時も学生は「すすきの」に行って、コンパしていたのでしょうか？

室田 それは多分変わらないですよ。

髙橋 良くコンパはやっていました。

鎌田 私は少林寺拳法部で、コンパは一切やったことがない。遊びに行くのは男連中だけ。女子とは全く縁がなかった（笑）。

髙橋 黒い軍団だったよなあ。学ラン着て地下鉄の駅とかでも大きな声で挨拶交わしていて、勘弁してくれって感じだったね（笑）。

●今では本学は地下鉄の駅直結で、立地的には今は非常に良い大学です。東京の大学と比べても、こんな利便性に恵まれた大学はそうありません。そこで、学生生活についてですが、こういうことは勉強になったとか、皆さん、お子さんが大学生になられるような年齢になり、当時の学生と今の学生との違いなどを感じることはありますか？

室田 僕らの時は学校に行くのが楽しかった。いろんな友達がいてね。うまく言えませんが、今は型破りな若者が少なく全体が真面目になっているんじゃないですか。

髙橋 喫茶店で無駄話をして、そのままお昼に学食に行って、御飯を食べて帰ってくる。

室田 そうそう、まさにそういうパターンでしたけどね。「じゃあバイトに行ってくる」「授業は良いの？」みたいな（笑）。

鎌田恵一さん
1985年経済学科卒業
札幌清田高校出身

●授業のほうはどうでしたか？

鎌田 試験前は真面目でしたよ。先輩から傾向と対策を聞いたりね。

室田 うん、4つくらい論文形式が出て、後はどれを覚えるかは運だって言われたね。

髙橋 そう、この4つの内どれか出る！

室田 いやそれでも全然違うのが出てしまって、仕方なく、勉強していったことを書くんです。出題とは全然違うんですよ、テーマが。でも最後に切々と教授にお願いの文を書くんです。「私は1年間このテーマについて考えました。こういう結果になりましたけど、何卒よろしくお願いします」って。その内容には「可」の評価がもらえましたよ（笑）。

鎌田 模範解答を考えてくれる奴もいました。

室田 とにかく4年間、時間は限りなくあったという感じですね。人生の勉強だと言って、すすきのに行くんですから（笑）。

●実はそういうご自分の出た大学に、お子さんも入学するという方が多いですね。お孫さんの世代も北海学園、二代三代っていうのが割と本学では多いんですよ。

室田 うちの娘は推薦で入れてもらいました。父親の出た大学だからまあ良いと。オープンキャンパスも行っていろいろ見るじゃないですか。そうしたら、凄く良いと。

一体感を作れる大学、卒業後も

●他の大学とは違う、北海学園大学のオリジナリティというのは何だとお考えになりますか？「北海学園大学のここが良いんだ！」というところをアピールしていただけますか？

髙橋英明さん
1985年経済学科卒業
函館東高校（現市立函館高校）出身

髙橋 キャンパスが狭いっていうのもありますけど（笑）、毎日顔を合わせるような、あの辺行ったらこいついるよなっていうのはありましたね。4年間一緒にいて学園の一体感みたいなのがありました。運動部に入ったおかげで、体育会繋がりで鎌田君のことは知っていたしね。

鎌田 そういうのはあるかも知れないですね。

石亀 道内に学園OBは多いですよ。「ああ、お前もか」っていう話になりますね。入学当初、周りは誰も知らないし、最初はぽつんとひとりでしたが、体育をやっていて、話しかけてくれたのが小樽出身の奴だったんですよね。気性が合ってそれからずっと、生涯の友達です。試験の時に、その小樽の友達のところで四、五人集まって勉強したんですよ。僕はそんなにレベルの高い高校じゃなかったんですけど、教え合いながら勉強して、皆一緒に卒業しようっていう一体感、そういうのが生まれましたね。

髙橋 そういえば、大学時代は高校の後輩たちに「お前も学園来いよ、楽しいぞ」って言っていましたね。

石亀 学園は学部だけじゃなくて、大学院研究科など、勉強するならもっと上に行けるという、本当に素晴らしい環境なので、上を目指してほしいと思います。それに、公務員試験の指導も力を入れてやっていますので、公務員職も多いですね。仕事で北海道庁などに行くと、歴史の最も古い経済学部をはじめOBが多いので、そういう面で助けられることもあります。

石亀剛さん
1986年経営学科卒業
函館北高校（現市立函館高校）出身

●確かに、学園OBで公務員という人は物凄く多いですね。学生数当たりで割ると、道外の大きい私大に比べても、公務員試験の合格割合は上位です。石亀さんのように友達同士で勉強会をしたり、現在は公務員志望者向けの各種の講座も充実していて環境は良いと思います。

時には一か八かでも、悔いなく一生懸命に生きて

●本学は創立から、「北海道の中核人材を育てる」ことを目標にしていますが、在学生やこれから入学する皆さんに、何か期待することはありますか？

髙橋 もちろん勉強もそうですが、4年間を楽しんで、スポーツもアルバイトも。遊ぶなら遊ぶ、どれも一生懸命にやってほしいですね。友達を沢山作って。結果的にどういうところに就職しても、そういうことは後に活きてくると思います。

室田 僕らも、年を取ったからそう思うのかも知れないけど。今日を一生懸命生きていないとね、悔いが残っちゃう。

●学生の頃は、何をやっても楽しかったですね。試験でさえも。

鎌田 それによく言いますよね。「お金はなかったけど時間はあった」って。今の学生は忙しそうに感じます。

髙橋 最近、スポーツの世界は「男」がいないとよく言われます。自分の責任でプレーをして、怒られても何をしても構わない、これは信念をもってやるんだっていう奴がいない。肝心な時に、一か八かの勝負が出来ないという人が多いみたいですね。

左から室田幸治さん、宮島良明先生、髙橋英明さん、石亀剛さん、鎌田恵一さん

室田 人生ずっと一か八かでも困るんだけどね（笑）。でも、知らないこととか、やってみないと分からないじゃないですか。失敗したらしたで、また何かひとつ自分のものになるというか、そうやって人間は育つ。どんどん海を越えて、アメリカでもアジアでも行ってほしい。若いんですから何をやったって良いじゃないですか。僕は全国企業に就職して、どこで仕事をしても良いと思った。一度道外に出ると、あらためて北海道の良さが分かる。

石亀 私は、今は市役所（函館市と戸井町が合併）勤めですけど、元々は町役場です。当時は、あえて上級職しか採用しない今とは違い、大卒の上級職で役場に入るのは物珍しく思われていました。ですから，学生の皆さんには，誇りを持って挑戦して欲しい。社会から必要とされる人間になって欲しいと思います。

北海学園大学から函館を見る、そして新しい函館を担う

●函館の未来というテーマにちなんで、函館の高校生にメッセージをお願いします。

室田 そうですね、函館の外の出来事に触れてほしいというか、より広い世界に触れるという意味で外の事を多く見る、聞く。そのひとつに北海学園大学があるんです。外に出るとまた函館の良さもわかるでしょうし、函館に帰ってきたいと思うかもしれない。

髙橋 函館としてはやっぱり戻って来てほしいですね。若い人がいなくなっちゃう（笑）。逆に室田さんや鎌田さんのように外からもどんどん函館に来て活躍してほしいですね。

鎌田 勉強して戻ってくれれば、また何か違った函館の良さみたいなものも感じると思います。力を付けて戻って来てもらい、新しいもの、例えば北海学園大学で学んだことと融合させる。そうやっていかないと変わらないじゃないですか、いろんなものが。

室田 今はどんどん地域間の距離が狭まっていっていると思う。新幹線がつながったら、どこもすぐっていう感じですよね。いろんなところを見て、函館はこういうところがちょっと違うんじゃないのと言って、行動して欲しいですよね。まあ函館に限らず、北海道に対してという感じかな。その頃には道州制になって、北海道は独立国になっちゃうかな。それを担う人材になってほしい。函館の人は、どちらかというと地域でまとまっているというか、地縁血縁が強いという面があるので、函館にずっとこもっているよりは、大学４年間だけでも外に出て、外から函館を見た方が人間的にもっと大きくなれると思うんです。大学４年間はやっぱり貴重ですよ。ぜひ北海学園大学の遺伝子を函館に持ち込んでほしい。

髙橋 函館にいると、知り合いばっかりなんです。「あの人の知り合いのあの人」とか、もちろん良い面もありますが、人同士すぐにつながる事が凄く多いんですよ。それで札幌に行って人見知りしちゃう部分があるかも知れないですが、いろんな人と接すれば、絶対に面白くなりますよ。

●函館の人は意外と保守的な面もあるのでしょうか。観光地としては最初にお聞きしたようにブランド力もあるし魅力もあるけど、一歩入り込もうとすると割と内向きのところがあるんでしょうか？ 札幌はいろんなところから集まって来てできたから、割とオープンマインドだって言われるのですが、函館は少し気質が違うのかも知れないですね。北海道らしくないのかも知れない。

髙橋 そうですね。それは間違いない。だから、大学ぐらいの年齢になると出る人も多いですよね。きっとまあ、かなり自覚しているんでしょうね。

●函館の高校生の皆さんがどんどん北海学園大学に来てくれれば良いですね。うちの大学は、十分そのお手伝いが出来ると思います。

室田 そうですね、本当に。

髙橋 そして将来、何か新しいタイプの函館を作って欲しいですよね、若い人には。イカール星人（＊動画サイトなどで世界中から注目を集めた、函館の注目キャラクター）が山手線で放送されて有名になっていったように新しい函館のイメージを作ってほしい。

●新しい函館に変わる時には、やはり外の事を見て来た人が中心になって担っていかないと変わらないですものね。そのような人材が本学部から育つように、これからも努めていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

この度の座談会では、北海学園大学同窓会道南支部事務局長の堀内博志氏（函館商工会議所）にご協力いただきました。

地域研修

「函館への思い入れ」

経済学部地域経済学科
山田 誠治 教授

振り返れば、山田ゼミとして過去８回、地域研修やその前身であるゼミ調査合宿の時代から、ほぼ毎年函館を訪れています。テーマは、以前は「函館のまちづくり」でしたが、ここ５年は「地域を元気にする函館地域メディアの現状」へと課題を変えてきました。かつては、学生たちが駅前地区・五稜郭地区を対象に、商店主や通行人を対象にアンケート調査をし、店舗を回り、まちづくりの考え方や好感度などについての聴き取り調査をしてきました。実に様々な意見や考えを聞きましたが、まちづくり組織の人たちの取り組みを聞くことを通じ、また、ある種のまちのまとまりを築く上で、まちの人々の意識のもち方が重要であり、また、その点が鍵になる、ということから、近年は、まちの情報発信について関心が向いたという経緯があります。

地域研修において、函館市五稜郭地区でのアンケート調査を行うゼミ生と山田誠治教授（2010 年 9 月 15 日）

周知のことですが、函館は地域産業が大きく変貌し、まちの形も変わってきました。また道内での地位も変化し、その都度、様々な取り組みを行ってきた歴史があります。全国的な知名度が非常に高く、また、函館の地域の人たちの根っこにある意識にも、世代間での違いや、また、それを克服しようとする新しい取り組みと、その担い手の人たちの熱い思いにもたくさん出会えたことが、若い学生たちに強い影響を与えました。振り返って、函館でお世話になった人たちには改めて御礼の気持ちを伝えたいとともに、学生たちを受け入れてくれたことが、彼ら彼女らの学びの支えになっていることも、ご報告しておきたいと思います。函館に、感謝、感謝です。

函館市五稜郭地区で市民に対してアンケート調査を行う山田ゼミ I の学生（2010 年 9 月 15 日）

［OB訪問］

働きマン 6

面白いと思うこと、没頭できること一途に！

若杉 充宏さん

わかすぎ　みつひろ

はこだて柳屋本店

来年で創業60年になる函館の老舗菓子店「はこだて柳屋」の三代目社長として忙しい日々を送っている若杉充宏さん。学生時代にボディビルで培った学園スピリットは今も健在だ。

◀ 新製品の「季の菓（奉行所最中）」を持つ若杉さん

函館から札幌へ

函館市を含む道南地方は大学が少なく、進学先に本州や札幌を選ぶ高校生の割合が多い。若杉充宏さんも都会に憧れ、函館市内の高校を卒業後、都会に憧れて函館を離れた一人だ。

「家業が和菓子屋で長男でしたから、いずれ函館に戻ってくると、漠然とは自覚していました。経済に関する勉強の方が将来に活かせるのではないかと思い、学園を選びました。」という若杉さんは、やはり卒業後にUターン。来年で創業60年になる菓子メーカー「柳屋」の三代目社長として忙しい日々を送っている。

ボディビルダーの誕生

高校時代、部活動はしていなかったが、体を鍛えるのが好きで学校帰りにはよく市民体育館で汗を流していたという。それもあり、大学ではトレーニング系の部に入ろうと最初から決めていた。そこで入部したのがボディビル部（現在のパワーリフティング部）。めったに自分から戸を叩く入部希望者がいない中、先輩からは珍しがられる。毎日、授業もそこそこに部室に行き、授業やゼミの記憶が薄いほど練習漬けの生活を送った。人並み以上に食べ、体重を増やすためにプロテインという高価なタンパク質サプリメントを主食にするほどで、それを買うためのアルバイトも欠かせなかった。「ボディビルといっても、筋肉を見せるだけではないんですよ。ベンチプレス、スクワットとセットリフト三種類で、重さを競うっていう競技もあります。2年生のときから真駒内アイスアリーナのトレーニング場でアルバイトもしていましたが、そこのアルバイト指導員は歴代北海学園のボディビル部の学生が受け継いでいました。4年間ほとんどクラブばかり、それで良かったんじゃないかな、仲間も増えましたしね」。2、3、4年と3年間、全道のチャンピオンになり、4年生の時には大学から個人表彰されるほどの実力者になった。

ボディビル部集合写真（卒業アルバムより、前列右から3人目が若杉さん）

流通菓子から菓子メーカーへ、家業から企業へ

そんなボディビル漬けの学生生活も、卒業が目前に迫ってきた。すぐには函館に戻らず札幌で就職する事になる。「どうせ就職するのであれば家業のお菓子屋と同系の職種ということで、菓子流通のナシオを希望しました。就職内定は早く、4年生の春くらいにもらいました」。しかし、一筋にのめり込む性格は卒業さえも遅らせる事になる。早々と決まった内定後、体力を見込まれアルバイトに通いだすが「アルバイトに明け暮れすぎましてね、1科目の単位を落としちゃったんですよ。そのころ丁度ナシオの社長は学園の同窓会副会長の名塩良一郎さん。裏切るようなかたちで卒業出来なくて。けれど、一応採用してやるからと、内定取り消しにはならなかったんですよ。ですから昼はナシオで働いて、授業のある時だけ早めに帰り、二部の授業を受けさせてもらいました。それで単位を取り無事卒業しました。卒業後5年は、ナシオで働きました」。なんと大らかなやり取りだったことか。

当時ナシオは、セブン－イレブンに流通菓子を納めており、最先端の流通のシステムやセブン－イレブンの仕組みを内部から見ることで、大いに勉強になったという。POSシステムが導入された頃で、POSシステムの根本も現場で学んだ。

5年後、いよいよ家業に着くため函館に戻るが、早速ナシオ仕込みの経営感覚でパソコンを導入する。「当時パソコンは5インチフロッピーの時代で、ガッチャンガッチャン言ってました。それを導入して、例えば各店の売り上げの対比などをやりはじめたんです。帰ってきた頃、20年前はやっぱり家業だったんですよね。それで家業から企業にしていかなければいけない。家業から企業にするにはどうしたら良いか。それにはやはり、きちんとした経営管理が必要になるんです」。家業といっても新米社員の若杉さんは、最初は配達が主業務、それが一段落すると事務所にこもり、パソコンで商品管理、販売管理に没頭した。「今でも各店の管理、支払いは全部私がやっています。忙しくて休みはありません。365日会社に出てきていますよ」。学生時代に培われた気概は今も生きている。脇目もふらず一直線の性格は変わらないらしい。「面白いと思うことはいくらでも吸収するんですよね。だから、自分が没頭出来るような目的を一回みつけてしまえば、それが自分のカラーになるんです」。

現在、柳屋の店舗は、函館市内に13店。商品の「いか羊羹」は全国菓子博覧会名誉総裁賞を受賞し、市内の菓子店9社と共同で「函館スイーツ」も企画している。「箱館奉行所」の復元にちなんだ統一ブランド「奉行所最中」などの新たな試みも熱く語る若杉さんは「柳屋の生命線は出来たてをその日のうちに、作った物をその日のうちに食べてもらうこと」だという。この創業60年の柳屋の一途さが、今の若杉さんのバックボーンなのかも知れない。

profile

1960年　函館市生まれ
1979年　函館市立東高校（現、函館高校）卒
　　本学経済学部1部経営学科入学
1983年　株式会社ナシオ入社
1984年　本学部卒
1988年　株式会社「はこだて柳屋」入社

[平成 22 年 10 月]

「NIE 出前講座」第2弾がおこなわれる

10月18日から10月29日に、日本経済新聞社「日経読み方アドバイザー」の岩崎寛氏をお招きして、前期に引き続き「新聞を活用した教育（NIE：Newspaper in Education）」の出前講座第二弾が全基礎ゼミを対象に行なわれました。冒頭、小林真之教授から、新聞を通じて経済を学ぶことの意義や日本経済新聞の歴史、特色などが紹介されました。岩崎氏からは「経済学部生として“日経”を読むことは“宿命”と考えてください」との発言から始まり、約40ページもある“日経”一日分の平均文字数が25万7千字、2百ページの新書2冊分に相当することや、その大量多様な記事内容の読み進め方のコツが話されました。経済学を学ぶ学生にとって、日常のさまざまな経済事象の読み解きが、新聞という身近なメディアで可能なことを知る、良い機会となりました。

[平成 22 年 11 月 27 日]　特別講演会

「子育て・教育で憧れのまちに ～恵庭市で取り組んできたこと～」

中島興世氏●前・恵庭市長

北海道内の自治体における具体的な地域づくりの事例を取り上げ、そこでの地域住民、自治体職員の地域づくりの主体形成過程を学ぶ地域社会論Ⅱでは、公開特別講義として前・恵庭市長の中島興世氏をお招きしました。中島氏が恵庭市職員時代から市議会議員、そして市長として30年以上にわたり取り組んできた恵庭市でのまちづくりについて、具体的な実践とその思いをまとめた「子どもの未来を拓く地域からの挑戦」という報告書をもとに語っていただきました。

子育てと教育こそが健全な国と地域のあり方を支える礎であり、こころを一つにしてまちづくりに取り組む地域で子育てをすることが、大切であることを学びました。

●上記の報告書はPHP総合研究所のサイトでご覧になれます
http://research.php.co.jp/policyreview/

[平成 22 年 12 月 3 日]　労働経済論 / 地域研修事業

―介護現場はどうなった？ 介護現場の検証とこれからを考えるシンポジウム―

「介護地獄はもうごめん!! 介護に希望と笑顔を!! part２」と題して「介護現場の検証とこれからを考えるシンポジウム」が労働経済論の特別講義として行われました。

まず、介護施設をめぐる問題の調査研究に地域研修として取り組んだ川村ゼミIの本間智浩君（経済学科2年）、佐竹孝紀君（経済学科2年）から、「介護現場はどうなった？」という報告があり、社会福祉法人愛和福祉会職員で札幌地域労組委員長の原田優子さんからは当事者として、「変わらぬ介護現場、疲弊する介護労働者」について報告がありました。

20年以上も介護労働に携わってきた原田さんは、利用者の尊厳を守るべく働いている介護労働者が、粗末に扱われている現実があることや、また、介護報酬改定や処遇改善交付金など国の施策による取り組みは、必ずしも現実の労働実態に対応できていないと訴えました。

介護施設にほのぼのとしたイメージを持っていたけれども、その笑顔で働く介護労働者の方々の緊張した動きに厳しさを感じたと言う本間君。夜勤などの実態を知り、想像を超えた過酷な労働だと感じたと言う佐竹君。全道290カ所に及ぶ特別養護老人ホームへのアンケートから浮かび上がってくる現実や、直接訪ねた施設での体験を契機に、さらに関心をもって行くことが必要であり、自分達に何が出来るのかを考えていきたいと語ってくれました。

[平成 22 年 12 月 4 日]

2010年度地域研修報告会

12月4日に、今年度の地域研修報告会が催されました。地域研修とは、地域が抱える課題を現地に行って調査し、そこの人たちと一緒に解決法や改善策を考え、実施することで、地域社会に貢献することを目指した講義です。研修テーマはゼミによって多彩で、研修場所も、北は道北から南は沖縄まで実に様々です。今年度は、夏から秋にかけて、25のゼミが研修を行い、報告会では3つの教室に分かれて、その成果を発表しました。

それぞれのゼミは、スライドを使いながら、研修のテーマや目的をまず説明し、その地域が抱える課題についての住民からの聞き取りやアンケート調査の結果、現地での体験など、研修の内容を報告していきました。また、実際に現地で見聞きすることで、研修前の事前学習のときと比べて、印象が変わったという説明などもありました。それぞれの報告の後の質疑応答では、他のゼミの学生から、研修内容について活発に質問がなされました。最後に、全体の講評として、司会の浅妻准教授から、「どのように地域貢献できるか、一人一人が考えながら、研修に取り組んだことが報告から伝わってきた」ことが述べられ、今年度の報告会は締めくくられました。

【私の履歴書】

伊藤 淑子

いとう よしこ

経済学部経済学科教授
［社会保障論］

オックスフォード大学の仮装パーティで

経歴

1972年 上智大学文学部社会学科卒業
1973年 東京都に採用
1983年 ロンドン大学政経学部研究生
1985年 上智大学大学院文学研究科博士前期課程修了
1989年 ボストンカレッジ客員研究員
1989年 日本女子大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学
1993年 北海道医療大学看護福祉学部助教授・教授
1994年 日本女子大学より博士（社会福祉学）を授与
1999年 北海学園大学経済学部経済学科教授（現在に至る）
2006年 オックスフォード大学聖アントニーカレッジ客員研究員

主な研究業績・著書

『社会福祉職発達史ー米英日3カ国比較による検討』（ドメス出版）1993年*単著
『ケアカンファレンス実践ハンドブック』（看護の科学社）1999年*単著
『現代日本の社会サービス（現代経済評論社）』2001年*単著
『新版社会政策ー構造改革の新展開とセーフティネット』（ミネルヴァ書房） 2003年*共著
『社会福祉の原理と思想』（有斐閣）2003年*共著
『エンサイクロペディア社会福祉学』（中央法規出版）2007年*共著
『21世紀イギリスの子どもサービスー日本への示唆』（ドメス出版）2009年*単著

人生何事も遅すぎることはない

大学生の頃

1968年に大学に進学した時には、特に何を学びたいという希望もありませんでした。1つだけ決めていたのは、自分の仕事を持ち続けていきたいということです。当時は女性の就職機会は今よりもずっと限られていました。考えたあげく、まだ珍しかった社会福祉学科に入学することにしました。とはいっても講義は全く面白くなく、大学紛争の時代であったということもあり、大学には行かずもっぱら新宿西口の3本立ての名画館で古い映画を見ながら過ごしていました。

公務員として東京都で働く

卒業後は東京都に「福祉指導」という職種で採用されました。当時、東京都に採用された大学の先輩たちは、児童館や障がい児の施設などで働いていましたので、私もそのような仕事につくと思っていたのです。ところが辞令の配属先は病院となっていました。医療ソーシャルワーカーといって、患者さんたちの生活相談に携わる仕事です。周囲の人たちは皆、きちんと教育を受けてきた医療専門職です。その中で医学の知識もなく訓練も受けていない自分が働くのは、ほとんど詐欺だと思ったものです。いつまでも無知なままではいられないので、周囲とのギャップを埋める努力をしているうちに、最初の数年は過ぎてしまいました。

神経難病にかかわって

26歳の時に、都立神経病院に転勤したことが、その後の人生を大きく変えることになります。この病院は神経難病というきわめて難しい病気の患者さんのために建てられた日本で最初の専門病院でした。病床数は限られているので、患者さんたちは日頃は自宅で療養することになります。患者宅を訪問しながら、患者と家族がその時点でどういう課題に直面しているのか、そのためにどのような選択肢があるか、情報を提供しながら一緒に考えるのです。

この仕事をする中で患者さんや家族から、多くのことを教えられました。難病にかかった時に、患者さんも家族も生と死の意味を真剣に考えます。そうした時に人はどれだけ強くなれるのか、深く印象づけられました。

この病院には、学閥を越えて全国から優秀な医師が集まっていましたが、彼らからも多くのことを学びました。こぢんまりした職場だったので、最新の研究の動向を聞く機会も多くありました。また私自身も彼らの書いた論文をできるだけ読むように努めました。その中で気づいたのが、医師たちは国外の情報をとる努力を、当然のように自分に課していたということです。

自分をふりかえると、何とも恥ずかしい限りでした。近代的な医療制度もソーシャルワークも、日本で生まれたものではありません。主要な議論は日本の外でされているのに、それについては何も知らないのです。これは他人の仕事を見て感心している場合ではないと痛感しました。

その頃は30歳を越えていましたが、人生何事も遅すぎることはない。大嫌いだった英語を集中的に学んだ後に、出身大学の大学院に入学しました。社会人学生のはしりです。　通学に便利なように、大学から一番近い都立病院に転勤したのですが、ここがまた別の意味ですごいところでした。新宿は歌舞伎町の真ん中にある超オンボロ病院だったのです。そこに来る患者さんは近くの住民に加えて、日雇い労働者、ホームレス、歌舞伎町で働く様々な国籍の女性たち、ベトナム難民などでした。この病院でも神経病院と同じくらい、多くのことを学びました。30歳代は、勤労学生として過ごしました。その間に修士課程と博士課程を終え、イギリスとアメリカの大学で学ぶ機会にも恵まれました。

英会話学校に通っていた頃。先生も他の生徒も私より10歳年下でした。（右から2人目が伊藤先生）

札幌での教員生活

1993年に当別町にある大学の医療福祉学科に赴任し、札幌での新生活が始まりました。しかし新しく関わるようになった福祉教育は、残念ながら決して充実したものではありませんでした。制度の足りないところを個人の努力でどこまで埋められるのか、自信を無くしかけていた時、北海学園大学の経済学部で社会保障論を担当する教員を募集していることを知り、幸い採用されました。

ここで再び、自分にとって未知の領域で働くことになりました。自分が担当する講義以外に学生たちはどのようなことを学んでいるのか、まずそれを知る必要があったので、いくつかの入門的な講義を聴くことから私の学園生活は始まりました。快く聴講を許して下さった先生方には、今でもとても感謝しています。その後、現在まで何とかやってこられたのも、学部の教職員の方たちの温かいサポートがあったからこそと思っています。

最後に学生たちへ

皆さんは北海学園大学がどのようにできたのか知っていますか？スタートさせたのは、皆さんといくつも歳がちがわない20歳代の若者たちです。当時は未熟だった北海道の中等教育を充実させたいと願った若者たちが、手作りで作ったのが北海学園大学の始まりでした。この若者たちは何かを「変えようとする意思」を持った人たちでした。「変えようとする意思」を持てば、勉強する必要が出てきます。その時の勉強は、楽しいものなのです。今北海学園大学で学ぶ若者たちにも、その意思を受け継いでほしいと思います。そして学ぶ楽しさを知ってほしいと願っています。

経済学部ゼミナール協議会の活動報告

経済学部には経済学部ゼミナール協議会（通称：経ゼミ協）という学生による団体があります。ソフトボール大会の運営をはじめ、経ゼミ協は学生どうしの研究・交流をサポートするためにいろいろなイベントを企画しています。

in 北海学園大学

2010年8月25～26日に第54期東北・北海道学生経済ゼミナール大会（通称：ブロゼミ）が本学で開催され、経ゼミ協が中心となって大会が運営されました。54回を数えるこの歴史ある大会は、東北・北海道の経済・経営・商学部系大学のゼミナール（少人数で教員とともに共同研究する科目のこと）が参加して研究成果を発表する場です。25日は「プレゼン部門」で、札幌学院大学、ノースアジア大学（秋田県）、北海学園大学のゼミが参加し、パワーポイントを使って約15分でお互いの研究テーマを発表し、審査委員によるコメントを受けました。26日は「討論部門」で、東北学院大学、旭川大学、福島大学、北海学園大学から総勢12ゼミが参加し、研究テーマごとに6つの教室に分かれ、各ゼミがこの日のために書き上げた論文をもとに討論しました。

▶ゼミ説明会・見学会

2010年11月6日に経ゼミ協主催による「ゼミナール説明会」が1年生を対象に開催されました。これは2年生になって自分が所属するゼミナールを選ぶ際に参考としてもらうために経ゼミ協が企画したものです。30を超えるゼミの代表者（学生や教員）がゼミナールの内容を集まった1年生に対して紹介しました。また、11月29日からの1週間は、実際に行っているすべてのゼミの授業を公開し、1年生は興味あるゼミの教室に行ってゼミの様子を見学できる期間としました。

▶プレゼン大会

2010年11月27日に「第2回プレゼン大会」が開催されました。1年生の基礎ゼミをふくめ、経済学部のすべてのゼミが参加できる大会で、各チーム（1ゼミから複数チームの参加有り）が研究テーマをパワーポイントで発表（10分）し、教員による審査で優秀ゼミを決めます。今年は24チームが参加しました。

▶2011年インゼミ in 北海学園大学

上記ブロゼミの全国版である全国学生経済ゼミナール大会（通称：インゼミ）は毎年12月に全国の大学持ち回りで開催されますが、来年は北海学園大学・北海商科大学にて開催予定です。毎年全国から100大学前後、1,500人前後が集まる大きな大会に向けて経ゼミ協がいまから準備に取り組んでいます。

学外有識者による講義～ゼミナールの活性化

経済学部では講義・ゼミナールでの勉学を充実させるために、外部からの講師を招く取り組みがなされています。この趣旨に沿って木村ゼミナールⅠは12月10日、日本年金機構札幌東年金事務所の畠山比呂志氏と小林和憲氏のお二人をお招きし、国民年金の制度が国民生活といかに強く結びついているかについて、お話をお聞きしました。

北海学園大学ポータルサイト>>平成22年10月1日スタート

“G-PLUS！(ジープラス)”とは、本学ポータルサイト（学生総合支援システム）の愛称で、大学に関する様々な情報を入手するためのWeb上の入り口です。本学のホームページから簡単にアクセスすることができ、本学の学生・教職員であれば誰でも利用できます（但し、利用申請は必要です）。この愛称は大学生活において今まで以上のプラス・付加価値を提供できるようにという想いと、学園の“G”を組み合わせて名付けられました。

この“G-PLUS！”の具体的な機能としては、大学や講義担当者等からのお知らせ・伝言受信機能、履修確認（時間割確認）や教室変更などの教務情報参照機能、大学・個人スケジュール管理機能、申込書や届出の書式のダウンロードができるキャビネット機能などが提供されています。また、各種情報は携帯電話への転送も可能なため、必要な情報をタイムリーに入手することが可能になりました。加えて“G-PLUS！”からは、各種e-learningシステム、Active メール、シラバス、休講情報、就職情報等へのアクセスもできるようになり、このようなサービスのすべてがインターネットを利用できる環境であれば、学内外の場所を選ばず実現されることになったのです。

●ポータルサイトPRポスター

さらに今後は、2011年度から2013年度にかけてシラバスシステム、WEB履修登録システムの順次導入を予定しており、提供可能な機能の充実を図りながら各種e-learningシステムとの連携を強化し、学生のみなさんの自学自習支援にも繋げていきたいと考えています。

econ. No.23　2010. 秋・冬号
発行：北海学園大学経済学部　　制作：株式会社 ラボット
〒062-8605札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL. 011-841-1161(代表)　FAX. 011-824-7729
http://www.econ-hgu.jp　北海学園大学エコン 検索　E-mail：kyomu-za@econ.hokkai-s-u.ac.jp
PRINTED WITH SOY INK 大豆油インキで印刷しています　R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用